

第11講 1981年3月25日の講義 (pp.281-303) ミシェル・フーコー講義集成〈10〉『主体性と真理』

K 原

ヘレニズム・ローマ期（前4-前1世紀頃）における婚姻モデルの普及 (pp.281-)

- ある性的振る舞いのモデルが、ヘレニズム期とローマ期に広まった。それは、本質的に結婚を中心に組織された（単婚の原理、配偶者の忠実さの原理が中心となっている）。
→このモデルは生殖と情愛の関係の優位をもたらした（驚くほど道徳的）、またその後キリスト教においてほぼその通りに取り上げ直されることになる。ただし「ほぼ」なのであって、違いは著しい。*キリスト教においては、完全な性的節制や処女性がはるかに価値づけられている。
- このモデルはヘレニズム・ローマ期のすべての人の振る舞いを特徴づけるものではないが、それらの社会を貫いて、そのダイナミズム、その展開の痕跡、しるしを残している。このモデルは、いろいろの長い言説によって同伴され、二重化され、その言説内部で再生産されている。現実を命令の言葉で言い直したように思われる言説である。この関係について、フーコーは歴史の問題と方法の問題を提起しようとした。
- フーコーが考えたい問題：現実とそれを再生産し命令の言葉で立て直すような言説との間にある関係
これは表象の関係なのか？一種のイデオロギーによる現実の回避？現実の実際的またはプログラムのな合理化？

婚姻に関する言説の本性。テクナイ・ペリ・ビオン

この問題をもう少し解明するために取るべき第一の手法

結婚の推奨・結婚すべきであると主張し、いかに結婚において振る舞うべきかを示そうとする言説全ては、自らをテクナイ（技術）・ペリ・トン・ビオン（生を対象とする）として自らを提示する。（＝行動の原理、振る舞いのコードとは異なる）→自らを規則として、ひとつのコードとして提示するというのを全くしない、あるいは必ずしも行わない。また、結婚の本質を提示することも行わない。純粹に理論的言説として自らを提示することもない。

テクネーとビオスの定義

テクネーとは何か？：ある目的のために特定の対象に対して変換を操作すること。

生（ビオス）とは何か？（難）：テクネーの対象となるもの。しかし、ギリシア人がビオスについて語る時、それに対してテクネーを用いるべきあの生とは、何を意味するのか？理解が難しい理由は、2つの事柄に由来する↓

- 1) おそらくキリスト教によるあの世とこの世の生の区切りのために、ギリシア的なビオスの統一性とその内在的な意味を失った。
- 2) 生は、我々にとって社会的区切り＝職業と地位による区切りで定義されている。キリスト教の救済の概念と地位の概念は、ギリシア的なビオスの意味を曖昧にしまうリスクがある。

三つの生

生（ビオス）を理解するために…

ポントスのヘラクレイデスのテキスト：ギリシアで伝統的に認められてきた生の3つの偉大な形態を定義している

「生は国民大祭（古代ギリシアで行われた、人々が神殿の周りで祝う集会）に似ている」

ある人①：格闘技で争うことが目的 ある人②：市を開くことが目的 ある人③：見せ物をするのが目的

格闘技で争う＝政治的生（栄光の奴隷） 市を開く＝富の渴望 見せ物を楽しむ＝真理の追求（哲学者たち）

ヘラクレイデスのテキストの特徴：

- 生の形態を仕事の性質によって定義しているわけではない。
- 生の形態は、ここではひとが欲望するもの、行いたいこと、探し求めるものによって定義されている。
- 結果としてその職業になっているだけであり、ピオスの特徴づけているのは地位ではなく、活動ではなく、行うものではなく、操る事物でもない。
- 自己自身が事物に対して持つと決めた関係の形式、事物に対して自らを位置付ける儀式、事物を合目的化する様式

キリスト教的（近代的）主体性とギリシア的ピオス（pp.286-）

- ピオスとはギリシア的主体性だと考えてよさそうだが、キリスト教的枠組みがこれを理解することを妨げる。
- キリスト教的枠組み（主体性）は、①あの世との関係性 ②回心の操作 ③本来性の實在、我々の主体性の根底、土台を形作っているであろう、真理の實在によって形作られる。

→キリスト教的枠組み(主体性)には、全員に共通の目的が、真理が存在していることが前提となっている

【ギリシア的ピオスとは？】

- 絶対的な共通項によって思考されるのではなく、各人が自己自身に提示する目的によって思考される。
- 回心の可能性ないし命令によって定義されるのではなく、自己の自己に対する持続的な働きかけによって定義される。
- 実存の形態そのものにおける目的への無際限あるいは有限な接近、むしろ探究として、到達しようとするも到達しない目的の探究として提示される。

【生の技術（テクナイ・ペリ・トン・ピオン）の対象となる生（ピオス）とは？】

- 結局のところ主体化の諸手続きであり、そう理解されるべき。
- 個人のピオス、主体性をコードの内側に挿入するための諸条件の定義である。コードの主体化の手続きである。

→テクナイとは主体化のための技法、諸手続きということになる。このテクナイについて語られることの理解をし直すためには、キリスト教において生じたものと比較するべき

異教からキリスト教へ。断絶と連続性（pp.287-）

- 歴史叙述に関する注釈：アフロディシア（ギリシア的、ギリシア＝ローマ的、ヘレニズム的、ローマ的な経験を経験づける倫理的知覚と呼ぶうるものをギリシア人が呼ぶ時の語。）法陳述的な側面に、許可と禁止の諸側面を与えて枠づけるようなコードの諸要素に力点をおくとき、紀元前最後の数世紀と紀元後最初の数世紀に古代文明の内部で流通した哲学言説は、キリスト教の肉の教義を形づくることになるものを予期していた。規則やコードに関する哲学言説のレベルにおいて、キリスト教は根本的な修正をもたらさない。
- 哲学者たちの道德教義とキリスト教の道德教義のあいだに連続性があることを歴史家たちは1世紀前から突き止めてきた。
- キリスト教まで維持され、続くことになるある種の行動のモデルが、ヘレニズム期に出現し発達していたことを歴史学の学説は示していた。キリスト教の出現はまったく断絶をもたらさない。
- 異教とキリスト教の連続性を確立するやり方が標定できる（ベイリーやボズウェルの本により）。ヘレニズム期からキリスト教が出現し、重きをなし、普遍的と言わないまでも公的な宗教となり、深く根付いた時期に至るまでの長

い歴史を、ひとつの全体、連続体として見なす必要がある。

→じゃあ、一体どこに断絶を挟むべきなのか？

- フーコー的には、キリスト教内部でのある種の変容が起こった3,4世紀に区切りを重ね合わせる必要がある（＝古典古代や古典後期が発達させた自己の技術や主体性のテクノロジーに代えて、新たなテクナイ・ペリ・ドン・ビオンを用いるようになった時代）。

→ここで、キリスト教徒が肉と呼ぶあの何かの母型を形作るものが出現する

古い価値づけの体系と新たな行動のコードのあいだの両立不可能性

- この講義の出発点はアルテミドロスの夢分析の方法のテキストだった。これにより、アフロディシアの一種の倫理的知覚を標定できた。良いものと悪いもの、より価値のあるものと価値のないものとを定義するために従う2つの大いなる原理を評定できた：1つめが社会的－性的同型性（性的関係はその社会関係の内部に位置付けられる）、もう一つが能動性（主体が能動的であるほど性行為は価値を増す）
- これら2つの基準は、男性的行為の特権のうちで一致している（挿入・射精）。その結果、ギリシア的思考において女性的行為、女性的快楽は男性的行為のモデルに基づいて近くされ、分析され、反省されていた。性的行為にはただひとつの本質しかない。それは男性の性行為によって定められていた。
- 古い価値づけの体系…性的行為の価値は、自らの権利を行使する男の社会的特権、快楽が認めて報いる能動性の価値によって価値づけられることを可能にしていた。古い価値づけの図式とコードとのあいだには、分岐と両立不可能性がある。

【第一の変容（両立不可能性）：社会的－性的同型性】

- 結婚は絶対的に特殊・特別で、他のすべてとは異質なひとつの関係を形作っている。その形の強度のために、他のいかなる社会的関係とも重ね合わせられない。→結婚の孤立化が起こる
- 絶対的に特権化された関係、これを基点として他の関係が分配されることになる。
- 確立された新たな行動のコードが示すこと：アフロディシアがこの結婚のなかに位置付けられなければならない
- 性的関係の価値づけは、社会関係の一般的な格子に従ってなされるのではない。同型性は存在しない。ただ、社会と性との明らかな二型性がある（一方では、アフロディシアが生み出されるべきである唯一の関係としての結婚が、他方ではアフロディシアを持ってはならない他の社会的な関係からなる関係）。→社会領野の脱アフロディシア化

→新たなコードと社会的－性的同型性という伝統的な古い価値づけは両立不可能である

【第二の変容（両立不可能性）：能動性】

- 男女を問わず自らのパートナーに対する物理的かつ社会的な支配として理解されていた能動性の原理は、もはや価値を持ち得ない。性的関係とアフロディシアの唯一の保持者であるべき結婚関係のなかで、夫の諸権利と諸義務は妻のそれらに対するある種の平等へと向かっているため。夫婦のあいだに一種の互酬性が存在しうるために、これらの諸権利と諸義務はかなり厳密に限定されなければならない。
- 新たなコードにおいては、結婚の主要な快楽、その恩恵は、夫の排他的でまったく非対称な能動性によるものではなく、2人での生活やある種の互酬性がもたらす快適さと利益による。→もはや能動性は価値を持ち得ない

【これらをふまえてのテクナイ・ペリ・ドン・ピオン】

- ストア派はコードをより過激にした。彼らはまったく厳密なひとつの体系を作り上げた。ストア派よりも同型性や能動性の原理に固執した人たちはいない。ストア派のなかで、それらは厳密に維持されていた。
- 行いの技法の役割とは、主体自身の変容の手続を規定することである。主体はコードに住まい、それを実践し、受け入れることが可能となるのであり、価値づけの二大軸（同型性と能動性）とを保つことが可能になるはずである。

主体化の手続きによる調節。性の分裂と自己の管理（pp.292-）

- 主体の練り上げと変容に関する3つの大きな線：
 - 第一に、個人が自らの性的アイデンティティと結ぶ関係における切断の定義、あるいは自己自身の性に対する個人の関係の二つの様態の定義
 - 第二に、自己の自己に対する関係の特権的な対象として、アフロディシア、世の快楽の構成があり、それは欲望の形式を取る
 - 第三に、性的快楽と結ばれた情動の領域の構成
- 生存の技法が行おうとした第一の大きな操作：個人が自己自身の性に対して持つ二重の関係の構成
- ひととは結婚し、自らの配偶者と密接に結ばれ、共生の关系到、クラーシスの関係に入ると同時に、市民で人類のメンバーになることができるという主張（妻との生活の次元、共生の次元、私的な内面世界の次元、他方に公的な生活様式、外的な生活様式、集団での生活様式がある）→二者間の関係と、複数者間の関係とが、結婚の技法の厳密で恒常的な関係である
→ストア派、あるいはこの類の哲学や生き方の助言とともに公的生活と私的生活との区別、「外的」世界と私的世界との区別が誕生した。これら生存の技法を通して、いかに個人が両方の次元にすることが可能かを示すために、結婚を特徴づける二者間の関係と社会的生を特徴づける複数者間の関係とのあいだの交差点にすることが可能でそうしなければならないことを示すためにかなりの努力が費やされた。
- クセノフォン、擬アリストテレスなどでは、妻、家、内的で私的な生活は、公的生活の補完物でなければならなかった。女との関係（私的関係、二者間の関係）は公的生活の実在条件である。
- それとは反対に、公的生活は私的生活とは異なり、それを補完する何かとして現れるのではなく、私的生活そのもののなかでその形式と効果を有する何かである。男、夫、市民は二つの次元にまたがって存在し、自らの公的生活の条件をその指摘生活のうちに見出し、自らの公的生活のうちに、私的生活において權威を強調し定めることを可能にする諸要素を見出す。
- プリニウスの手紙は、彼の妻は彼が公的人物である限り愛の关系到ある→私的関係に基づき、彼は公的生活を行うことができる。二つの次元の切断ではなく、両者の文節に、男が二つの関係の体系の中継点に位置している。

男は自らの男性生に対して2つの異なる種類の関係を持たなければならない。

- 妻と性的関係を持つ可能性（さらには義務）…妻と性活動を行う限りにおいてオスの個人になる
- 社会の領野において、男、オスとしての自己同一化は性的活動の実践とは関係せず、たんに社会のなかで男の地位、性的関係の実践に依存しない男性生の地位を有することに関係する。→オスとしての性的活動と男性性の地位のあいだに本質的な断絶が現れる。男は二つの性を持つという条件でのみ、蝶番をなし、家族－社会の連続体を、社会的－性的な連続体を保証しうる。
- かつては、個人が男であるというその瞬間から、社会において男という社会的地位を有したその瞬間から、その事

実によって性的能動性という形式のもとで自らの男の地位を実践する可能性と権利を有していた

- しかし、1-2世紀に入ると、男であること（社会領野において男の地位を有すること）は能動性の実在と性的能動性への権利を含意しない。結婚の内部においてのみ、男の地位は、第一にそして原初的に性的な能動性の意味を有する。結婚の内部において男の地位が派生する。→男の地位と男性的な能動性との関係の反転こそが生存の技法の主要な目標の一つだった。
 - 生存の技法が行おうとした第二の大きな操作：アフロディシア（快楽、性的活動）を自己の自己に対する関係の特権的な対象とすること（欲望の形式において行われる）
 - 姦通の対象性に関するムソニウス・ルフスのテキスト：妻が夫に対して忠実である以上、夫は妻に対して忠実であれという義務を最も堅固な仕方で確立した。
 - 姦通とは、かつては他人の妻を寝とることだったが、今や結婚以外のあらゆる性的関係が姦通に属し、ありえないものとされている。ムソニウス・ルフスがこのような対称性を打ち立てたのは、厳密に法的な観点からである。
 - 人間存在のあいだには自然な不平等が存在しない以上、ある人々（女性）に課された義務は、他の人々にも同じ仕方で課されなければならない。ムソニウス・ルフスはむしろ、義務の対象性という原理はそのような議論を通じてではなく、道徳上の不平等によってそれを確立している。夫と妻が法律上平等の立場にあることが本当だとしても、なおも夫の現実の役割は妻の指南役であり、妻に正しい道を示し、妻にいかにして生きるかを示すことである。（ムソニウス・ルフスはそれを「教育する」という語を使っている）
 - 自らが自己自身に対してこの支配関係を結べないときに、どうやって妻に対して支配関係を確立できるのか？男は妻の人生の指南役であり師でなければならないゆえに、男は自己自身の師でなければならない。
- 法的平等という原理はほぼ重要ではなくほぼ虚構、どれほど男と女は不平等な関係かということも分析の核心に位置している
- 興味深いのは、自己の自己に対する統御の関係こそが根本になっていること。自己の師であるという条件において、他者の師であることができる。ソクラテスに関してクセノフォンやプラトンにおいて見出される実践：自己統御とは、実現されうる欲望とは何か、実現されえない欲望とは何かを定義するような限界、尺度の一種だった。ひとが自由で活動的な市民であるという意味で師である瞬間から、ひとは、真理とは何か、いかにして生きるか等々を教える少年に対して師となる。他者に対する統御を、自己に対する統御によって限界づけなければならない。自己への関係は、他者の統御に対する権利を保つための前提条件となる。

例）ソクラテスとアルキビアデスの話：ソクラテスはアルキビアデスとの身体関係を控えた

それはソクラテスがそのような欲望を抱かないからではない。アルキビアデスに対して望み通りに教育的な関係を持ちたいなら、性的快楽を諦めなければならないと考えたため。しかし、欲望は存在し続ける。だから、欲望が現前するとき、いかに自己統御を行い、その欲望によって至るかもしれない行為に対抗するかを示さなければならない。

「いかに私の欲望が、私の望みを越えたところまで私を引っ張るのを阻止するか」

→自分は欲望を持っていて、しかしその欲望に抵抗することが可能だ、ということを示す

例）生き方に関する書物や論考、行動に関する論考が提示した新たな自己のテクノロジー

「いかにして私が望まないようにすることができるのか、いかに私から欲望を引き剥がすか」

→自分は欲望を持ってはいけなく、欲望を感じさせないという欲望の抹消

能動性の原理は、自己自身に対して、欲望という自己自身のあの部分に対して、支配を行うことになる？